

## 支援会議参加者からのメッセージ

### 『外国につながる子どもの教育 外国人生徒支援会議からのメッセージ』(2016年3月)

#### トルコから来た子ども

壬生町立南犬飼中学校 栃木 康子（所属は執筆当時）

「トルコから来た子どもが4人いるんだ。日本語はほとんど分からない。よろしく頼むよ。」  
4月、日本語教室ごと、教員生活初めて中学校業界に異動した私への、校長先生からの第一声でした。  
「トルコ?!トルコって何語を話すの?!」。大急ぎで調べると、当たり前ですがトルコではトルコ語を話すことが分かり、大至急トルコ語の本を購入し、2年生二人、1年生二人の子どもを迎える準備をしました。

春休み中、生徒たちの保護者が学校に来ました。父親らは3年くらい前から日本に来て仕事をしていたので、日本語がいくらか通じますが、日本に呼び寄せられたばかりの母親らは、日本語が分からず、不安そうな暗い顔をしているように見えたのが気になりました。

幸い、子どもはみんな明るく、「学校大好き」と言って、元気に学校に通ってくれました。イスラム教徒のかれらは、教室で給食を食べるのではなく、日本語教室でお弁当を食べます。毎日アンネ(トルコ語で「お母さん」)が、作りたてのおいしいそうなお弁当を届けてくれます。ふだん、1年生や2年生の教室では、静かにしていることが多い子どもも、お弁当の時間は堰を切ったように喋り出します。分からない言葉が飛び交う中、そのときばかりは私がただ一人の「外国人」です。寂しさや不安を共感できた時間だったかもしれません。子どもが楽しく会話をしているうちはいいのですが、けんかが始まってしまうと、言葉が分からない私には、誰が発端なのか誰が悪いのか、判断がつかなくなってしまうのには困りました。

「トルコでは算数が得意で、クラスで1番だった」と言っていた2年生の女の子も、カリキュラムの違いからか、算数の授業には苦労していました。「これはトルコの算数とは違う」、と必死に訴える彼女。でも、教室の授業についていけるようにしなければ、と少し厳しくしてしまった私は正しかったのか、正直分かりません。「だめ」「違う」「そうじゃない」と、否定的な言葉を連発してしまっている自分に愕然とした私は、トルコ語で褒め言葉をたくさん用意し、「いいね!」「そうだよ」「賢いねえ」と、励ますように工夫しました。そうすると失っていた自信を少しずつ取り戻してくれたようでした。

「私たちにも日本語を教えてください」というアンネたちも加わって、多い時には兄弟も含め9人ものトルコ人が小さな教室で勉強し、楽しく日々が過ぎていきました。あんなに暗く見えたアンネ達の表情も明るく朗らかになった気がして、とても嬉しく思いました。

けれど、別れは突然やってきます。ババ(トルコ語で「お父さん」)たちの仕事が減ってしまったり、病院での日本語が分からず不安になってしまったりなどの理由で、違う県に引っ越していく家族、トルコに帰っていく家族など、次々に私の学校をやめていきました。無力な私には、「元気でね」と見送ることしかできませんでした。

もっと教えられることはなかったか、もっとしてあげられることはなかったか…、かれらが去ったあとの私は、そんな自責の念にかられるばかりでした。ニュースで、イスラム教徒の子どもがいじめにあっていてと聞けば、「大丈夫かな」と心配になり、トルコのことが報道されれば、「みんな無事かな」と心配している自分がいます。「この町に、この国に来て良かったと思ってきているだろうか」と、今でも考えてしまいます。

外国の子どもとの関わりは、突然始まり突然終わることも珍しくありません。だからこそ、「今」という時間がとても大切だと、あらためて気付きました。次に関わる外国人児童生徒には、いつどんなことが起こっても、後悔しないように接していかなければ、と自分に言い聞かせています。この空の下、どこかで元気に過ごしている、あの子たちを思いながら。

#### HANDSプロジェクトによせて

那須塩原市立東小学校 手塚 正人（所属は執筆当時）

HANDSプロジェクトがスタートして、六年が過ぎようとしています。それは、私が日本語教室の担当となってからの数と同じです。私は未だに、日本語の習得方法、日本ででの生活の適応などよりよい支援するための方法に悩み迷っています。まして初年度など、教材もノウハウも情報もなく、何から学習していいかわかりませんでした。「まずは文字が習得できれば」、とスタートしたことを思い出されます。そのように目の前のことで精一杯なときに、県内の日本語教室や外国人

児童の実態や苦労の様子を伝えてくれたのが、HANDSプロジェクトでした。

会議に出席して、何もわからず迷っているのは、自分だけないと知りました。同じことで苦労している担当者がたくさんいることに、取り組みへの不安が和らぎました。たとえば、外国人児童の転入・編入事務手続きや中学校入学説明会のときに、正確に伝えるサポートをしなければなりません。また、公簿や事務手続きも年に何回もあるわけではありませんが、緊張します。手続きなどを正しく進めるための説明や関係の法律など、教員必携『外国につながる子どもの教育』や、ホームページの「だいいじょうぶnet.」など、何度も参考にしました。

他の拠点校とのつながりは日本語教室の運営に計り知れないメリットがありました。授業の進め方や学級経営のあり方は、担当者として最も大切な仕事であり、やりがいでもあります。しかし、実践の方法や計画立案は、自分だけでは限界があります。何か方法はないかと頼りにしたのは、周囲の拠点校でした。教科書も指導書もないとき、学習の進め方や内容など、経験豊かな拠点校の実践に基づいた情報はすぐに生かせるものでした。それらを参考に授業をすると「〇〇の言い方が違う。」「わかった。」と児童の反応が生き生きとしてきました。ちょっとした質問や授業の流れの工夫の仕方をもっと知りたいと思いました。「だいいじょうぶnet.」他にも、文科省のポータルサイト「かすたねっと」などのインターネットサイトを知り、時間をかけずに手軽に情報を得られたのも助かりました。拠点校やネットの情報なくして本校の日本語教室は、いろいろな視点からの試みなどにつながらなかったと思います。

さらに、外国人生徒の進学など、避けて通れない課題についても、考える機会を得ることができました。苦労している外国人の児童の実態がわかるにつれ、使命感や責任感がますます沸いてきました。「高校進学ガイダンス」、そして映画会や報告会への参加を働きかけたのもそのためです。特に、「多言語による高校進学ガイダンス」は、近くの会場での開催になったおかげで参加しやすくなりました。このガイダンスは、外国人生徒にとって単なる情報だけにとどまりません。学習意欲の高まりや希望の広がりなど、その後の取り組み方にも大きく影響するものでした。

私は、夏休みに学校で汗をかきながら、漢字や読み取りの文章題に励んだフィリピン人男子児童を思い出します。彼の努力は実り、希望の県立高校に合格することができました。英語スピーチコンクールで地区代表になるなど、彼が夢に向かって活躍していることを聞くと嬉しくなります。HANDSプロジェクトの活動は、日本の生活・学校に適應できない児童やその家族、指導の仕方に悩む現場教員にとって、とても役に立つ情報となりました。

こうして、HANDSプロジェクトを振り返ってみると、『教員必携 外国につながる子どもの教育』シリーズや、『中学教科単語帳』シリーズなどの刊行物を通して、外国人児童・生徒や教育関係諸機関、かれらをとりまく社会など多方面への働きかけがあったと感じています。外国人児童生徒の教育に携わる人たちだけに関わるのではなく、日本語教室の存在を広く社会に伝えるなど、環境改善につながる活動に取り組みられました。日本語教育の状況や苦労が広く知られるようになり、文部科学省も少しずつ環境整備を始めたことは、HANDSの取り組みと大きく関係していると思います。まだまだ、HANDSプロジェクトについて思うことは尽きませんが、やっと動き出した外国人児童生徒教育の取り組みにおいて、今後も欠かすことのできない存在だと思っています。今後も、新たに発生する課題や、日本の社会で苦労している外国につながる人たちのために、蓄積された知恵やネットワークを生かして、活動する組織があることは大切です。これまでの恩恵に感謝しつつ、自分もさらに努力していかなければならないと考えています。

#### HANDSとともに

那須塩原市立共栄小学校 赤沢 正基

HANDSプロジェクトは、外国人児童生徒教育に携わっている私にとって、無くてはならない存在です。管理職や教育委員会にとっては、さらに必要なものでした。外国人児童生徒教育の分野のことは、情報や定説が十分には無く、通常の日本人児童生徒の場合には想定されないケースに関する判断など、相談先・判断の拠り所として無二の存在となってきました。

卒業と留年、就学と退学、小学生年齢以外の対象者の受け入れ、海外進学手続きと言語対応など、多くの難問への相談にのっていただきました。お医者さんの往診のように、学校や関連地域にお出でくださったことも何度かありました。

5年くらい前までは、外国人児童生徒支援といえばポルトガル語・スペイン語対応ということが定説になっていた、他の言語については中国語とタイ語が時折扱われたくらいの時代に、アジア圏の諸語への対応の必要性を訴えさせていただきました。本プロジェクトにおいては、学習用語集を次々に新たな言語で出版したり、多言語進学ガイダンスの言語を増や

したりなど、目に見える対応をしていただきました。

近年増加しているフィリピン系児童生徒への対応については、学部内でも特に研究していただきました。さらに、外国人の移動は、茨城県や群馬県との間では特に多く、北関東というエリアでのこの3年間の研究から、私の現場にとっても役立つ内容がいくつかありました。

HANDSの発足より前に、宇都宮大学国際学部主催のシンポジウムに参加した際、市民の方から、忘れられない意見が2つ挙げられました。一つは、ODAの一部を国内ODAとし、日本国内在住の外国人支援に使うべきだという意見でした。本当にそうなれば、多くの課題がかなり解決されると思います。ぜひ、政治家の方々に考えて欲しいと思います。

もう一つの意見が、大学の発表・提案は良いのだが、大学の研究と実際の外国人の方々の生活や学習への支援との間には、時間の面においてかなり意識のずれがあるというものでした。大学は研究なので、実際にいま困っている人々には、研究成果が生かされないという意見でした。そういった声を生かしてのことか、その後、HANDSが発足し、大学が地域を直接支援する仕組みが整い、現在に至っています。もちろん、国全体での大学の地域貢献ということもあったと思いますが、シンポジウムで吸い上げられた声も生かされたのではないかと思います。

HANDSには、本当にお世話になってきたのはもちろんですが、情報の受け手にとどまるのではなく、分担する・作る・発信するという関わりもさせていただきました。そう考えると、私もHANDSの一員と言っていいのかも知れませんが、たくさんついている手に自分の手を繋ぐことで有機化合物となって私達を結びつけるもの、それがHANDSではないでしょうか。



## 子ども国際理解サマースクール

